

確率メガネ

厚見中学校 1年 吉村 貫希

まだまだ寒い三月のはじめ、小学六年生の山田信夫は、学校の帰り道を歩いていた。ちようどそこに、メガネが落ちていた。

(あ、メガネが落ちてる。あとで交番に届けよう)

信夫は、メガネをポケットに入れた。

家に帰ってから信夫は、学校の宿題である割合の勉強に取り組んだ。

途中でわからない問題を考えていた時、ふとメガネのことを思い出した。

(あれをかければ、ちよとは頭がよくなった気分になるかもしれない)

そう思つて、メガネをかけてみた。メガネには度が入っていなかった。

それでも問題がわからず、ほおづえをついていると、「カチツ」と音がして、メガネのレンズにパツと文字が現れた。

わけがわからずメガネのつるをさわると、ボタンがついている。ほおづえをついた時にボタンを押してしまったのだとわかった。

メガネのレンズに出ている文字を読むと、

「チヨコレートの金額は、アメの金額の130%」

と出ている。

(そうか、これは算数の答えを教えてくださいるメガネなんだ！)

さっそく、次のページの図形の問題を見てボタンを押した。しかし、メガネのレンズには何も映らない。

(やっぱり気のせいだったかな…)

そう思いながら、信夫はベッドにゴロンと横になり、無意識にメガネのボタンをカチカチ押しながら、

(明日のテストが延期にならないかな)

などと思っていると、またメガネにパッと文字が映り、

「明日のテストが延期にならない確率95%」

「明日のテストが延期になる確率5%」

と出ている。

(わかったぞー！これはいろいろな確率を教えてくれるメガネなんだ！)

と信夫は理解した。

もつとも、確率の結果には残念だったが…。

それから、信夫は確率メガネを使いこなすようになってきた。

中学校に入り、小学校の復習のような学習内容が続いた。

他の教科については普通だったが、割合の問題だけは、いつも全問正解だった。

また、気になることがあると、すぐに確率メガネを使うようになった。

確率メガネの答えに、間違いはないのだ。

夏休み前、お父さんの仕事の都合で、家族で引越すことになった。

お母さんから、そのことを聞いた信夫は、すぐに自分の部屋に入ると、

(引越さずにいられる確率！)

と思いつつ、確率メガネのボタンを押した。

メガネのレンズには、

「あなたが引越さずにいられる確率3%」と出た。

(まあ、そっくだよな)

と思いつつ、その下にある文字を読むと、

「あなたが引越す確率3%」

と出た。

(あれ？ じゃあ、残りの96%は何なんだろう？)

不思議に思いつつ、さらに下を見ると、

そっぴん

「あなたが引越し前に死ぬ確率96%」
と出ていた。